

渡辺文夫著「異文化のなかの日本人—日本人は世界のかけ橋になれるか—」淡交社 1991年10月16日刊を読む

異文化とのよりよい関係をめざす

—異文化とうまく過ごす—

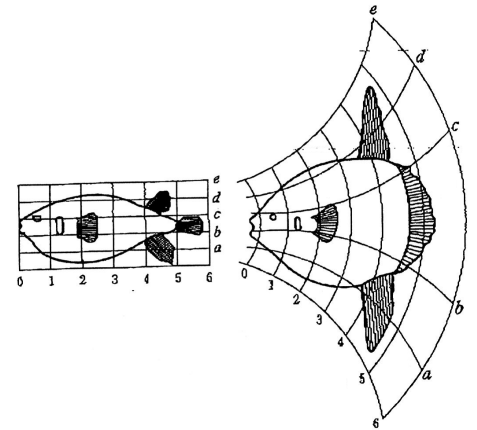
はじめに

異文化の人たちと仕事や生活をうまくするためには、どうしたらいいのだろうか。こまかいテクニク的なこともあるが、もっとも重要なのは、物ごとに対するその人の基本的な姿勢になる。この基本的な姿勢が相手に伝わるのだ。ここではその主なものを取り上げる。

1. 違うことと同じことをいっしょに捉える

- (1) ある人に対して、自分と同じだと感じるのと違うなと感じることの差を、外国の人たちに会うと、日本にいる時よりもより、強く大きく感じることは、前に説明した。
- (2) それまで、国は違っても自分と同じだな、と思いつき合ってきた人が、思わぬところで全く違った考え方を持っていることに気づき、「もういっしょには仕事ができないかな」と悲観的になったり、絶望的になったりすることは、よくあることだ。
- (3) 自分と同じものと違うものとを、悲観的にならずに、大きい視野でうまく整理できる考え方はないのだろうか。
- (4) 図を見てほしい。

この絵の左側はふぐの絵だ。このふぐの絵を、ある一定の規則に従って変形させると、右のようなマンボウの絵になる。マンボウとふぐは違う魚だ、と思われているが、基本的な体の構造は同じ魚であることが、この絵でわかる。違いと共通性がいっぺんに捉えられる図である。このように外に現われた形は異なるが、その深いところにある共通な構造に目を向ける考え方は、構造主義と呼ばれている。



- (5) 異文化の人たちと行き違いや対立をした時に、この絵のような見方をすると、少し気がおさまり、より冷静な対応策を考えるゆとりが、できるように思う。
- (6) 構造主義…第二次世界大戦後、世界を風靡したマルクス主義やサルトルの実存主義の基盤にある歴史と人間との関係への硬直的な見方を打ち破った思想。構造主義を唱えた人類学者クロード・レヴィ＝ストロースは、表面的ではなく奥底に隠れているさまざまな要素の構造的関係を解析し、一見異質と思われる地球上の近代のおよび未開の社会には、人類の長い歴史の流れとは関係なく、共通な世界が広がっていることを明らかにし、思想家に衝撃をあたえた。

2. 関係のあり方を変える

(1) 発展途上国へ派遣された技術者の人たちのなかで、どのような人がうまく技術移転を行なっているのかを調べてみた。その結果、比較的うまく技術指導をしていたと思われる人ほど、指導を受ける相手との間にあるいろいろな事柄の関係のあり方に関心を示し、その関係のコントロールを重要視する傾向がみられた。

(2) たとえば、その一つは、彼らは技術指導の際に直面するいろいろな問題を解決しようとする時に、指導を受ける人たちが、望ましい技術行動を自ら起こしやすいように、手がかりとなるサインと、その行動が適切であったかどうかのサインとをはっきりと相手に示すことを重視していた。具体的には次のようなことが、ひとまとめにした考え方である。

A. 計画実行の明確化

例——業務、フローチャートを作成しちゃんと書いて「君の仕事はこれだ」とはっきりさせる

B. 理由の明確化

例——怒って理由をはっきり伝える

C. ほめる

例——怒らないでうまくほめる

D. 間違いを注意する

例——ミスしたのを「だめじゃないか×××(人名)」とはっきりいう

E. はっきり意志を伝える

例——「できません」「できます」をシンプルに伝達する

F. 何もしない

例——特別何もしない

G. 環境を作る

例——整理整頓するために床にペンキを塗る

(3) これは、指導を受ける現地の人たちの自発的・的確な行動を促すためにすべきこと(計画)やこちらの意志をはっきり示し、さらに適切な行動を促進するための環境を作り、相手が行なったことに対してはこれが良かったか悪かったかはっきりとその人たちにわかるように、伝達することを重視する考え方だ。

(4) 比較的うまく技術指導をしていた人たちはまた、指導上の問題を解決するために行なった自分の行動の効果が、どの程度であったのかを知るために、自分と相手との関係の変化に関心を向けようとする考え方が強く見られた。

(5) その考え方とは、次のような関係の変化の見方をひとまとめにしたものである。

A. 意志や気心が通じる

例——気心がわかったらスムーズに行くようになった

B. 仲間意識ができる

例——ある種の仲間意識みたいなものを少しは植えつけた

C. (任地国の被指導者は)自分を肯定的に見てくれる

例——彼らが私の存在そのものを認めてくれた

D. 仕事ができるようになる

例——皆協力してできるようになった

E. 説明するとわかる

例——(説明すると)「じゃあ元に戻します」という話をしてくれた

F. 親しくなる

例——今まで話せなかったことも気やすく話せるようになった

G. 仕事がうまくいくようになる

例——それ以降はなんとなくうまくいくようになった

(6)簡単にいえば、問題を解決するために行なった自分の行動の結果、被指導者との人間関係が良くなり、仕事がしやすくなったか否かを見ようとする考え方のようだ。

(7)このように二つの考え方をひとまとめにして、「**関係重視の認識の仕方**」と呼ぼう。

(8)海外で技術指導をよりじょうずに行なっていたと思われる人ほど、**自分と異文化の相手との間にあるさまざまなものごとの関係のあり方に関心を向け対応する傾向**、つまり「**関係重視のストラテジー**」を強く持っている、といえる。

(9)これまで行なわれてきたさまざまな研究を整理し、ここで述べたような関係を調整する能力が、異文化接触では重要になることを指摘した研究者がいる。関係論的な異文化間能力論だ。

(10)ルペンというアメリカの研究者は、今までさまざまな研究者によっていわれてきた、異文化接触で重要とされるさまざまな能力(異文化間能力)を、次の三つに整理した。

A. **関係を作り維持する能力——肯定的な関係を作り維持することに関する能力**

B. **情報を伝える能力——情報をできるだけ落とさずゆがみなく伝えることに関する能力**

C. **承諾を得る能力——説得をし、協力あるいは承諾を適切に得ることに関する能力**

(11)相手とのよりよい関係と有効なコミュニケーションとを持つ能力が重要だということになる。

BとCとは一歩的な感じも与えるが、彼の分類が優れているのは、それまで多くの研究者が考えてきたように、異文化間能力を「忍耐力」とか「柔軟性」というように性格特性として見るのではなく、自分と相手の関係を調整する能力と考えた点だ。

(12)異文化の人たちと接する時には、関係のあり方が重要であることを示すもうひとつの考え方を紹介しよう。

(13)予測や推測が難しい異文化の人たちとの接触においては、主観的な思いや感情(たとえば「自分は現地の人たちからはよく思われていないのではないか」という不安)と自分と相手との客観的な関係との間には特にギャップが生じやすい、ということ、フィリピンに派遣された日本人技術者と彼のまわりに住んでいるフィリピン人との関係の調査の事例で、前に説明した。

(14)このような状況で、異文化の人たちと仕事をする時には、次の四つの可能性を忘れずに考えておくと、自分と相手の関係のチェックが冷静にしやすくなる。

A. **カルチャーショックを体験していないが、異文化の人たちとの関係は、悪い。**

B. **カルチャーショックを体験しているが、異文化の人たちとの関係は、良い。**

C. **異文化適応がうまくいっていると本人が思っているが、異文化の人たちとの関係は、悪い。**

D. **異文化適応がうまくいっていないと本人が思っているが、異文化の人たちとの関係は、良い。**

(15)この場合の「関係が良い」というのは「自分や相手が、不適応感に悩んでいようがいまいが、あるいはショックを受けていようがいまいが、お互いの存在を否定したり無視したりしないよう

なやり取りが相互にある」状態をいう。

(16)カルチャーショックも不適応感も感じないで、自分もうまくやっているなあ、と思える時でも、油断せずに、異文化の相手とのやり取りを一步離れて冷静に見、問題がないかチェックする心構えが大切になる。

(17)また問題が生じているかもしれないと、感じた時には、自分の主観的な感情や思い込みに捉われず、相手を否定したり、無視したりしないような働きかけをし続けることが大切になる。場合によっては、双方の関係を修復してくれる仲介者が必要になるし、ほどよい距離をとることが、大事になるかもしれない。相手の感じや考え方が、想像しにくい異文化の人との間では、このように関係を調整することによって、事態を改善していく、という考え方が、特に重要となる。

3. おわりに

異文化に住む人たちが、どんな暮らしや考え方をしているのかを理解することは、大事なことだが、それ以上に、異文化との接触で問われるのは、総合的な関係調整能力、つまりさまざまな事柄を考慮し、相手との関係を調整する能力なのだ。

P164 ~ 172

<コメント>

上智大学教授で異文化教育方法論の第一人者である渡辺文夫先生の「異文化とのよりよい関係をめざす」にはどうしたらよいかの教えは、日本人同志でも有用だ。是非、御一読を。

— 2016年6月17日(金) 林 明夫記 —